



NPOさとやま通信

NPOさとやま会報 第70号

2020年(令和2年)1月発行



城の遺構と自然が残る根木内歴史公園、初冬のたたずまい

市民が主体となって保全整備をしている県内の里山を、昨年から順次、紹介しています。行政と市民がどのように協力して、どのような保全整備をしているのか、市野谷の森の管理運営の参考にするべく、取材をしています。“里山を守る”シリーズに改題して今回ご紹介するのは、松戸市にある根木内歴史公園。公園サポーター「根っ子の会」が市と“協働”して管理運営にあたっています。(p.2 参照)

目 次

“里山を守る”シリーズ③「根木内歴史公園」	 2
10月の自然観察会「トンボ」	 4
ジャパンバードフェスティバル2019	 5
12月の自然観察会「野鳥」	 5
樹木医が見た流山の風景⑫「赤城神社」	本澤 賢一 6
観察会・行事のご案内	 8

“里山を守る”シリーズ③ 根木内歴史公園（松戸市根木内字城ノ内）

国道6号を南下し、流山市から松戸市域へ入った一帯には、中世・戦国時代に城がありました。享徳の乱（15世紀中頃）から関東は戦国時代に突入し、東葛地方は北進する北条勢力と、対抗する反北条勢力（里見・上杉ら）とが対峙する軍事的に重要な地帯となり、15世紀後半に根木内城が築城されました。その後、高城氏が小金城を本拠地として東葛地方を支配し、根木内城はその小金城を東から守る軍事拠点としての役目を担っていたと考えられます。谷津などに囲まれた台地上に造られた根木内城の規模は東西230m、南北550m。現在は城跡の真ん中を国道6号が貫き、その北西側一帯は住宅地になっていて、城跡の面影はありません。

しかし東側一帯は、上富士川（坂川の支流）の氾濫原をもととする湿地帯が残り、台地上や斜面に常緑広葉樹を中心とする樹林が広がっていて、豊かな自然環境が保たれています。樹林地には戦国時代の歴史遺産である土塁や空堀、土橋（土でできた橋）が見られ、城の面影がうかがえます。この地が根木内歴史公園（約2.5ha）として、松戸市と公園サポーター「根っ子の会」（沓岐貞俊代表）との“協働”によって管理運営されています。（場所は「交通アクセス」参照）

公園南側の県道261号に面したメイン入口には、駐車場とトイレが設けられています。公園東側を流れる上富士川に沿って桜の並木がのび、脇の園路を進んでいくと立ち枯れたヨシやオギが茂る湿地、収穫が終わって耕起された田んぼがあり、間に畦道が見えてきました。なんだか

“懐かしい光景”です。訪れた12月上旬は冬枯れ風景ですが、春にはヨシやオギが青々と立ちあがり、初夏の風にサワサワと葉ずれの音をたてるころにはオオヨシキリが「ギョギョシ」と大声を張りあげていて、いろいろなトンボが飛び交っているのでしょうか。

湿地の畦道をいくとセリが生えていて、緑の葉が生きいき。傍らの茂みでチッチッと鳴くのはアオジかな？ 近くにはパーゴラ（藤棚）があり、散歩に来た人がベンチでおしゃべりしています。初冬のやわらかい日差しが心地よく、静かでのどかです。住宅街と国道などに囲まれた地に、こんな湿地や林が広がっているとは思っていませんでした。しかもこの湿地には、全国で数が減っている植物のタコノアシ、ミクリなどが生き残っているそうです。

虫たちが棲んでいそうな草むらが広がる先へ進むと、湿地の中に幅広の木道が通っていて、歩きやすい。池の中の小島や水辺にハンノキが数本、立っていて、その向こうはもう国道6号で車が疾走しています。

湿地から西へ曲がって坂を上り、シラカシやイヌシデなどが茂る斜面林の中へ入ると景観が変わり、高みから湿地全体を見通せます。小径脇には幹の直径が20cmもあるヤマフジの古木が立ち、近くの大木のとっぺんにまでツルを伸ばしています。その頭上をシジュウカラやメジロなど“冬の混群”が通り過ぎていき、ニーニーという鳴き声はヤマガラでしょうね。紅葉の名残の葉がハラハラと舞い落ちてきます。遊歩道



写真①：樹林地の下に田や湿地が広がる初冬の風景



写真②：斜面林の小径からは湿地全体を見渡せる



左＝写真③
草刈りなど、湿
地の手入れ作業

右＝写真④
秋、実った稲を
束ねてハゼ掛け

(写真③④は
「根っ子の会」
提供)

が整備されているので林の中も歩きやすい。

土塁の間の坂を上っていくと、伐採した木々を置く場所が林の中に確保されていて、これは整備の参考になります。丘の上には広い「芝生広場」があり、ここでオカリナ演奏会などのイベントを開いたりしているとのこと。広場を抜けて公園南端から東へ下っていくと、城跡の深い空堀と土塁があります。地面を深く掘り下げた、敵の侵入を防ぐための水のない壕です。当時はどんな城だったのでしょうか……いまは木々に覆われていて想像するしかありませんが、佇んでいるとシンとして心が静まります。空堀脇の小径を下ると、公園入口に近い湿地へ出ました。これで園を一周したことになります。

湿地の水路は自然状態のように見えて、じつはよく手入れされているのだと思いました。公園自体は小さいものの、自然状態に近い湿地や林でありながら、遊歩道は歩きやすく、整備されています。自治体と市民グループがどのように協働して管理運営にあたっているのでしょうか。根っ子の会事務局の三嶋秀恒さんにお話をうかがいました。

——根木内城跡を公園として開設するにあたり、松戸市は市民と協働して管理運営する方針を立て、2006年に第1回根木内歴史公園ボランティア体験講座を開いて公園の維持管理方法や自然の生態系などを学ぶ一方、将来的にどのような公園にしていくかを語りあう場にしました。講座修了生を中心に公園サポーター「根っ子の会」(約30人)ができ、翌2007年に施行された「松戸市協働のまちづくり条例」に基づいて市と根っ子の会の公園整備の協働がスタートしました。市(公園緑地課・協働推進課)は、根っ子の会の活動全般へのバックアップ(資機材の提供など)、公園のハード面の整備(倒木処理など)をし、事業に必要な「負担金」を会

へ拠出します。これを受けて根っ子の会は、湿地帯・樹林地の保全整備、生物調査・観察会・各種イベントの開催などをおこなっています。2009年には市の「協働事業提案制度」を活用して、会独自で編成したプログラムによる第2回体験講座(5日間・有料)を開催しました。

根っ子の会の日常的な活動は、毎週金曜日の午前中にメンバー(だいたい十数人)が集まって下草刈りや清掃、水路の保全、ヨシ刈りなどをおこない、毎回の活動内容を写真入りでホームページ上で報告。また月1回は市職員を交えてのミーティングで活動状況を報告したり課題を話し合っ

て情報共有をしています。湿地植生の整備にあたっては、湿地をエリアに分けて作業していて、草刈り重点地区、弱草刈り地区、希少種の保護地区、畦の管理＝頻繁に草刈り地区などを設定しています。こうした整備方法をめぐって、当初はメンバー間で意見の相違(自然のままの景観を守っていくか、整備を進めて安全で明るい景観にするか)があったりしたものの、それを乗り越えて合意形成のノウハウを得てきているとのこと。メンバーの年齢が上がってきていることもあり“自分たちにできる範囲内で作業をする”“会員外の人も巻き込んで協力してもらおう”ことが事業継続の要点であることは、どこのボランティアグループにおいても同じです。

“皆でつくる公園”をモットーに、市民参加を増やすためにイベント開催にも力を入れていきます。植物・昆虫・野鳥の観察会や調査、ヨシ刈り体験会、田んぼで採れたもち米で餅つき会などを開催する一方、「虫ハカセになろう」観察会や竹トンボなどを作る夏休み工作教室、ザリガニ釣りなどには、大勢の家族連れや子どもたちが集まってくるそうです。また千葉大園芸学部と連携し、植生管理のアドバイスを受けたり



写真⑤：敵の侵入を防ぐための大きな空堀の跡

学生たちによる調査や植栽計画を受け入れていて、この連携が公園管理の上で大切な役割を担っ

てもいます。

初冬の日、散歩にきた人たちが園内をゆっくりと通りすぎていきます。その後ろ姿から、近隣の住民たちにとって憩いの場になっていることがうかがえます。根木内歴史公園での協働事業は松戸市で初めての先進的なモデルケースであり、今後は若い世代の人たちにも加わってもらえるよう期待します。（岩瀬記）

【交通アクセス】 ●電車利用：千代田線北小金駅南口から東へ1km余、徒歩で約15分 ●車利用：国道6号を南下し、流山市から松戸市へ入って最初の信号（根木内交差点）を左折して、約300m先の左側に駐車場入口があります（いちかわ動物病院の向かい）